



発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4248
FAX 095(842)4460

サンタが街にやって来る

カトリック中町教会
主任司祭 野下 千年

もともとサンタクロースがクリスマスと直接関係あるものではありませんが、巷にはクリスマスは来なくても、サンタクロースだけはやって来るようです。商店街のクリスマス大売出しの会場や、おじさんたちやヤング仲間のパーティー、子供たちや老人施設にと、サンタはいまやクリスマス文化として定着しています。

神様からの偉大な贈物である御子キリストのイメージ、貧しい人、苦しむ人の友となり、人々への愛のためにご自分の命までも与えてくださったキリストのイメージをサンタの姿のうちに発見できる目、その様な姿に共感できる心を子供達に育てることができれば、サンタクロースの

登場はクリスマスに相応しいものですね。そのためにも、わたしはサンタによせる気持ちを「戴くサンタ」から「差し出すサンタ」へと転換する必要がありますかね。豊かさの上にも、豊かさの上積みするサンタでなしに、豊かさの中に生きる子供達に、もっと困っている子供達に、もっとお友達のいることを気付かせ、子供たちに協力をお願いしたいと思います。それこそ馬小屋の幼子のメッセージであり、トルコの聖者シント・クラウスの教訓だからです。そしてこの「新たなサンタクロース文化」が、豊かさの国に生きる日本の子供たちによって創造さ



次は私の体験談です
私からの本当にささやかなクリスマスプレゼントとしてお受けください。

れ、世界へと広まることはなんと素晴らしいことかと思えます。

私が東京のある教会に住んでいたとき、その付属幼稚園から、またまたサンタの役を頼まれてしまいました。サンタ登場の演出についての先生たちとの話合いの中で、ついに私の新しいサンタ論を提案するチャンスに恵まれました。私は出演の条件に、今年のサンタは空っぽの大きな袋を持って、子供達の前に現れること。子供達には前もって伝えておいて、サンタに差し上げる御土産を用意させておくこと。サンタは子供達から戴いた御土産を袋に一杯に詰めて、お父さんを無くしたかわいそうな子供のうちや、病気の人や、身寄りのないお年寄りのところへ、子供達の見送りを受けながら出発するというシナリオです。先生方はとても困りました。なぜなら、もうすっかりサンタの袋の中身は準備され、サンタから子供たちに配ってもらったばかりになっていたからです。そこで今年は一とまず、予定どおりプレ

ゼントを配ってもらい、そのあとで、一月前からお母さんたちと子供達とで、困っている人達のためにためてきた助け合いの募金をサンタに渡して、かわいそうな人達のところへ持って行っていただくという筋書きに落ち着きました。

いよいよクリスマス会の日がきて、サンタは登場し、子供達へのプレゼントが配られた後、子供達の代表が助け合い募金の箱をそのままサンタの袋に入れました。サンタは子供たちにお礼を述べ、これからみんなを集めたお金で御土産を買い、困っている人達の所へ届けに出発することをお知らせします。子供達は口々に「いつてらっしゃーい」とか、「来年またねー」とかいいながら、サンタの出演を元氣良く見送りました。私のサンタ役はみごと成功しました。これまでやってきたなかで、最も清々しいサンタ役の経験でした。

馬小屋の幼子イエズスの限り無い祝福に包まれて、新しい年をお迎えくださいますように。



Q&A...



クリスマスの風景

Q・クリスマスは今では日本の社会にすっかり根付いているように見えますが、それはイエス・キリストの誕生とは別物であるような気もします。このままでよいのでしょうか。

A・確かに日本のクリスマス風景の中には商業主義が透けて見えることがあります。クリスマス商戦などということは飛び交い、まるで戦いの場であるかのようです。

毎年訪れるサンタクロースも、結果的にその袋の中に商業主義の実りを携えているということになります。

しかしそのような風潮の中でも、社会のあちこちで、本来の姿に帰ろうとする動きがあることも事実です。

その一つの試みが第一面に記されています。

それは「戴くサンタ」から「差し出すサンタ」への方向転換です。これはクリスマスの根本テーマでもあります。

クリスマス会の日、サンタが登場し、子供たちにプレゼントが配られたのち、今度は子供たちの代表が、助け合い募金の箱をそのまま、サンタの袋に差し出したというのです。

その集められたお金で、本当に困っている人たちに差し上げるおみやげを、買って届けるとサンタに、「行ってらっしゃい」とか「来年またね!」とか言いながら見送ったと。

クリスマスの秘儀とは、あふれる愛の勢いに抗しきれず、愚かにも自分より大事な御子イエス様を、人間に差出してしまったという、神の親バカな思いを思い起こすことにあります。

この試みはそういう意味で、世の風潮を神の風潮に切り替えようとした、とても貴重なものであったと言えるのではないのでしょうか。

Q・難しいことはよくわかりませんが、クリスマス由来事とは、「神が人となった」という表現で言われていることの記念である、と聞いています。このことは、人間と神さまの関わり方に、何か特別のヒントを与えるものなのでしょうか。

A・神学用語で言うところの、「受肉論」ということかと思えます。

神が身に見える肉体をもつ人間としてこの世に來られたということです。このことは、わたしたちがいつしか造り上げてしまっているかもしれない固定観念を打ち破ってくれるものでもあります。

こんなクイズみたいな問いかけがあります。「太陽はわたしたちの上にあるのでしょうか。それとも真ん中にあるのでしょうか」と。

普通太陽は、私たちの頭上はるか、高い高い上空にあると考えます。

しかし本当は、太陽系という世界の、真ん中にあり、その周りを私たちが住んでいる地球も回っているのですから、上にあるというより、この世界の真ん中にあるということになります。

では神さまは、上におられるのでしょうか。それとも私たちの真ん中におられるのでしょうか。

クリスマスは、上というより真ん中におられる神さまを指し示しているのです。

真ん中すなわちこの世界の中心であり、人と人の真ん中、そして私たちの内部の中心です。



この中心点からの視点こそ、神さまの視点であり、この視点から見える世界をモデルとして、現実の世界を造り変えようという試みが、宣教（福音化）活動ということになります。

Q・「上におられる神」ではなく「真ん中の神」という発想をすると、どんな変化が訪れるのでしょうか。

A・そのことこそ、一人ひとりの中で繰り返して黙想し、もし固定された不毛な観念が残っているとすれば、打ち破る努力をする必要があるでしょう。

長崎教区では頻繁に、「信仰」という言葉が飛び交います。しかし一口に信仰と言っても、その具体像はさまざまです。

中には、どうもねじれてしまっているとしか言いようのないものもあるようです。

それらはほとんど、「神が人となった」という事実の深めが足りないことに、原因があるようです。

たとえば、結婚記念日に、カトリックではないが心優しい旦那さまから、高価な指輪を贈られた、カトリックである奥さまが、「神さま、ありがとう」と言って神さまには感謝したのに、人間である旦那さまには感謝しなかったとか。そのために気まずい

雰囲気となり、カトリックとはなんという宗教だということ、反発をかってしまったとか。

たとえば、あまりにも神さまは上におられると思ひこみ、いつの間にかその思いこんだ本人が神さまとすり替わり、やたらと上から権威を振り回すとか。

たとえば、殉教とは人間の中の神さまの愛の、爆発的あかしであるわけですが、これを説く者が、殉教者に倣えと言いつつ、人を批判し悪口を言って排除し、実は殉教者ではなく、迫害者に倣ってしまっているとか。

たとえば、上なる神を拝むあまり、つい上からの目線となり、人間の痛みへの感性を失ってしまい、本人は気づかないうちに、人権侵害となるような言動に陥ってしまうとか。

Q・最近 クリスマスシーズンになると「馬小屋巡り」が盛んになっていると聞きましたが・・・。

A・最近の歴史ブームに乗って、いわゆる「さるく」と言われる史跡巡り、ゆかりの地巡りがよく行われるようになりました。

そういうブームの延長なのか、クリスマス馬小屋巡りが、特にカトリックでない方々の興味をひきつつあるようです。

これらの現象は、クリスマスの本来の意味に復帰するための、一つのきっかけになるかもしれません。

神の子イエスは、動物が雨露をしのぐ洞窟、いわゆる「馬小屋」にお生まれになったと言われます。いわゆる「ホームレス」です。

社会の片隅に追いやられて、いのちを紡ぐ以外にすべのない方と連帯する（インマヌエル）ことを、強烈に訴える誕生法だとも言えます。

そういう意味で、「馬小屋」はこの世界の縮図であるとも言えるでしょう。

現実の馬小屋も現実の世界も、イルミネーションの輝くきれいごとづくめの場所ではありません。汚物がそのまま流れられ、いやな臭いのする場です。

人間の現実の世界も、その奥をのぞいてみれば、自己中心と排除の論理、そしてその正当化がうずまく、汚物まみれと言えなくもありません。

馬小屋巡りに引かれる方々は、もしかしたら馬小屋のミニチュアに、この世界の現状をだぶらせ、無意識のうちに、それぞれ動物的感覚で、ほんとうにこの世界を救う者の気配を、嗅ぎとっているのかもしれない。

新しい要理
「共に歩む旅」
(21)

第十九課 「洗礼の秘跡」

・神さまの新しい子ども



【進行係】（参加者を歓迎して、十字架の印をしながら集いを始める）

「一人か二人の方が祈りで神さまをこの席に招いてくださいませんか。」

（誰でも自由な祈りを捧げる）

A. 私たちの生活

私達は洗礼を受けることによって、人間として背負ってきたすべての罪を許してもらい、神の真の子どもとなり、神の民である教会の一員となります。

【進行係】

「次の写真をご覧ください。」



【進行係】（参加者たちに質問する）

①そこに写っているのは皆「神への回心を果たした人」たちです。どうしてそう言えるのでしょうか。

②絵の中の人たちは、「神への回心を果たした」後、生活の何を変えたのでしょうか。

③この「共に歩む旅」の仲間に加わってから、あなたは生活の中のどういうことを変えましたか。
（一組対話をした後、全体の集いで発表する）

B. 神のことは

徴税人ザアカイの話を読んでみましょう。

イエスの時代、徴税人は人々から大変嫌われていました。彼らは規定以上に税金を取り立てたり、だましたりして、私腹を肥やしていました。さらに、彼らはイスラエル人の敵であったローマ占領軍に協力していたのです。

【進行係】

「どなたかルカ19・1・10（イエスとザアカイ）を読んで下さいませんか。」

・ ・ ・ 聖書を読む ・ ・ ・
「ほかの方がもう一度読んでくださいませんか。」

「次の聖書の言葉を一人ずつ順番に祈るように読んで下さいませんか。」

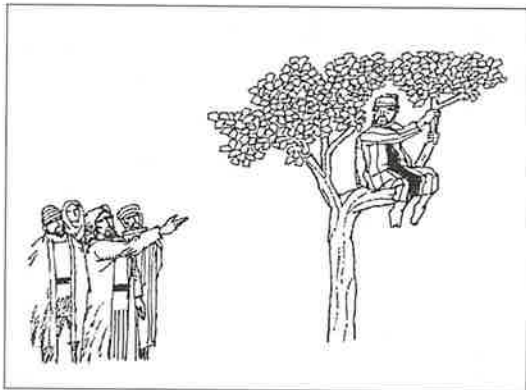
「見ようとしたが」（3回）

「急いでおりて来なさい」（3回）

「あなたの家に泊まりたい」（3回）

「喜んで」（3回）

「イエスをお迎えした」（3回）



【進行係】

「ザアカイがイエス様に出会いながら、回心して行く過程を聖書の本文から探して書いてみましょう。」

私たちは洗礼を受けることによって、神の子どもとして新しく生まれかわります。私たちは洗礼によって神の新しい民である教会の一員となり、イエス・キリストの中で一体になります。

あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。そこではもはや、ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。

(ガラテヤ 3・26・28)

【参考聖書】

- *ヨハネ 3・1・7
- ニコデモとの対話
- *ローマ 3・14・17
- 聖霊による神の子ら
- *ガラテヤ 3・26・29

洗礼でキリストに結ばれる

*Iペトロ 3・21

洗礼は良心で生きる誓い

C. さらに一歩進んで

旅をつづけよう

私たちは、洗礼によってキリストを私たちの中に迎え、キリストのいのちの中で生きるようになります。洗礼は、「神の子どもとして生きていくために、キリストの中で生きていきます」という決意の表明です。洗礼によって人はもはや世に属するのではなくキリストに属し、キリストを主であると宣言するようになります(ローマ 10・9)。洗礼を受けるためには、「主と共に生きていきます」という真の回心と決心が必要です。神の子どもに生まれ変わる時、私たちはまことに自由になることが出来ます。

【進行係】 (参加者たちに質問する)

- ① あなたもザアカイのようにイエス様を見たいとか、近寄りたいとの熱望を感じた時がありますか。(1組対話をする)

② イエス様を知るようになってから、あなたの生活に変化した部分がありますか。

または変化しなければならぬ部分がありますか。

【進行係】

次の神に希望をおく人の祈り「望徳唱」を唱えながら集会を終わります。

恵みの源である神よ、わたしは、あなたがイエス・キリストの救いのみわざによって、

約束のとおり永遠のいのちと必要な助けをお与えになることを心から希望します。

【進行係の心得】

* 洗礼は秘跡であり、実際にはその人の存在が根本から変えられる驚天動地のできごとであるが、表面上はささやかな「しるし」があるだけである。

【覚えましょう】

- 60・秘跡とは何ですか
* 秘跡とはイエス・キリストによって制定され、教会に任せられる

た恵みを目に見える形で与えるしるしです。

61・洗礼名はどのようにして決めますか
* 好きな、または模範としたい聖人や聖書の中の人の名前を決めます。

62・代父母の役割は何ですか
* 霊的な父と母として信仰生活を導く役割をします。

63・幼児洗礼とは何ですか
* 新たに生まれた赤ちゃんに洗礼を施すことです。

64・緊急な時、信者たちも洗礼を授けることができますか
* はい。誰でも、未受洗者であっても洗礼を授けることができます。

65・教籍とは何ですか
* 洗礼を受けた人が教会に籍を登録することです。



永井隆博士と

「神の摂理」 の問題

長崎大司教区司祭
山内 清隆



6・永井は神の摂理をどのように 生きたか

A 永井の摂理論の社会的背景

わたしは、長崎大学前教授、高橋慎司氏が、かれの著書、『長崎

にあって哲学する』（第I巻）で、永井の「摂理論」の、いわば社会的背景として述べていることは正しいと思います。高橋教授の論旨を要約すると、次のように言えます。当時の長崎には、一方では、長い迫害に耐え、ようやく浦上に帰り、無一文の貧しい状態から再出発し、全財産を投資し合って、当時は「東洋一」と言われていた浦上天主堂を建設し、この天主堂を中心に、いよいよ信仰の自由を謳歌して信仰を生き、信仰を広めよう、と意気込みながらも、しかし赤貧洗うがごとき貧しさに生きていた、当時の浦上の、いわゆる「隠れキリシタン」の集落がありました。しかし他方には、諏訪神社を中心とした伝統的な長崎、経済的にも裕福な長崎があり、しかもこの両者は相互に対立し合っていました。しかも諏訪神社の「おくんち」時には、浦上を中心としていたキリシタンたちにも寄付が求められ、神社への参拝が勧められ、そうしなければ「天罰」が当たる、と脅されていました。長い迫害にも耐えて、純粋なキリスト教的信仰を守り通した浦上の信徒

たちが、このような呼びかけに快く応じるはずはありません。しかも当時は、今日のように、宗教間、宗派間の対話など望むべくもなく、むしろ相互間には深い対立の溝があつた時代でした。

ところが恐ろしい原子爆弾は、諏訪神社側の人々が噂していた通り、浦上教会を中心にしたキリシタンたちが多く住む集落に投下されました。諏訪神社側の人々の予告がみごとに的中したことになりました。そこで原爆は「天罰だ」という噂が、長崎中に、まことしやかに飛び交うようになったのも、事情的には当然だった、と言うべきでしょう。残念ながらこのような悪い噂は、ただ非キリスト者たちの間だけではなく、それまで熱心だった浦上のキリシタンたちの信仰も惑わし、かれらに不安を与えていたことも事実です。

長い迫害と殉教の歴史に彩られながらも、信仰を守り通し、全財産を出し合って、まさに自分たちの信仰のシンボルとして、ようやくの思いで完成された浦上天主堂も、一発の原子爆弾で完全に灰塵と化してしまいました。「なぜ

われわれキリシタンだけがこのように苦しまなければならないのか」「これは、もしかしたら、巷の噂どおり、「あるい『天罰』かもしれない」、と真剣に思い迷ったカトリック信徒たちがいても、それは不思議なことではなかったでしょう。

『長崎の鐘』に登場する、当時、浦上カトリック信徒のモデルのように慕われていた山田市太郎も、このような迷いに苦しんでいた一人ではなかったでしょうか。『長崎の鐘』には、永井と市太郎の会話が記載されています。復員した市太郎が浦上で見たものは、完全に灰塵と化した長崎の町とわが家、愛する妻も五人の子供たちも黒焦げになっていました。そこで山田は永井に、「わしゃ、もう生きる楽しみはなか」と訴えています。「戦争に負けて誰が楽しみをもつとりましょう」と答える永井に、山田は、「そりゃさうばってん、誰に会うてもこういふですわい。原子爆弾は天罰。殺された者は悪人だった。生き残った者は神様からの特別のお恵みをいただいたんだと。それじゃわたしの家内と子

供は悪者でしたか」と永井に迫っています。そこで永井は、「わたしはまるで反対の思想をもっています。原子爆弾が浦上に落ちたのは大きな摂理である。神の恵みである」と公言しています。そして永井は続けて、「浦上は神に感謝をささげねばならぬ」とさえ言い放っています。永井の「摂理論」は実はここから始まるのです。永井がここで言いたかったことは、「原爆投下」は決して「天罰」ではなく、むしろ「神の摂理だ」という考えでした。換言すれば、永井の「摂理」発言は、原爆投下を「天罰」とする考えに對抗して言われたことです。もちろん永井のこのような「摂理」発言が、その場限りの、いわば突発的な発言でなかったことは明らかです。かれのこのような発言の内部には、かれ自身の熱い信仰が脈打っていたからです。

B 神の摂理への絶対的信頼

以上考察したようなカトリック的摂理論を、永井自身がどのように把握し、そして生きていたかに

ついて、ここで若干考察しておきましょう。まず気付くことは、永井が神の摂理に対して、まさに絶対的な信仰を生きていたことです。被爆前から、すでに白血病の宣告を受け、そのうえに原子爆弾によって何度も危篤を体験していた永井は、時にロザリオの鎖だけを灰の中に残して去って行った妻の死後は、やがて孤児となつて残される二人の子供の未来を心配し、心を痛めています。このような状況で永井は、『長崎の鐘』や『この子を残して』などの著書で、自身を論じ、二人の子供に対する神の摂理への絶対的な信仰を生きるように書き残しています。以下、永井が、『この子を残して』の中で、「空の鳥」と題して二人の子供たちに、やさしく書き残している箇所を、抜粋的にご紹介しましょう。永井は、「空の鳥」というタイトル通り、マタイ(10・26・31)や、ルカ(12・4・7)に記されているイエスの有名なたとえ話を示唆しながら、神への信頼を、次のように熱く語っています。

「イエズス・キリストの言葉を聞こう。『五羽のすずめは四銭にして売るに非ずや、しかるにその一羽さえも、神のみ前に、忘れられることはなし。なんじらの髪の毛すら皆算えられたり、ゆえに恐るることなかれ、なんじらは多くのすずめにまされり』。

この言葉を聞いて安心しない者があるか？神にお任せしておきさえすれば、誠一もカヤノも絶対に大丈夫である。一羽一銭の値打ちもないすずめ、なんの役にも立たないすずめ……」

永井はまた、誠一の一本の髪の毛を例に、神の摂理への絶対的な信仰を、次のように説いています。「誠一みずから己の頭の髪の毛の数を知らず、私に至つては髪どころか、虫歯の数さえ調べておらぬ。誠一を愛していると口にも言い心にも思っている私が、その実このような不完全な愛しかもっていない。……地上においてこの子をいちばん愛している私でさえ、これぐらいのところ。それに比べて、髪の毛一本一本にまで忘

れ得ぬ愛情をつないでいる神のその愛のこまやかさ、深さ、大きさ！まことにわが亡きあと、安心してお任せできるのは神、天にましますわれらの父である。そして神は、改めて私どもからお任せしたりお願いしたりするまでもなく、初めからこの子を抱いているからである……」

もちろんこのようなことは、超自然的、宗教上のことで、感覚的粹を完全に凌駕した、まさに信仰の世界に属する真理であることを、永井は明確に認めています。



はがき「如己愛人」
から転載

大司教談話室

⑪

小教区の
司牧訪問

Q. 大司教様には、教区長として、定期的に小教区を公式訪問する義務があると伺いました。それは、どのような方法で行われるのですか。

A. 長崎教区では、これまで一般的に、大司教が堅信式のために小教区に行くことが同時に「公式訪問」となっていました。堅信式の前に信者の歓迎を受け、式後に小教区代表の信徒の挨拶を受けます。その中で、堅信の秘跡の授与と「公式訪問」に対する感謝の言葉が述べられます。謝礼や花束をいただき、会食をしてからおいとまします。

そこで、わたしは着座の翌2004年5月26日と10月19日の司祭評議会で「司牧訪問」について諮問し、2005年3月末までに答申をお願いしました。しかし、明確な答申がないまま、いくつかの例を除いて、従来の「公式訪問」が続いています。わたしは、「公式訪問」というより、「牧者が自分の共同体を訪問する」という意味で「司牧訪問」としたいと思います。ここでは、実現の期待も込めて「司牧訪問のあらまし」を述べたいと思います。

1. 司教の牧者としての権利と義務

司教の自教区内の公式訪問ないし視察 (visitatio canonica) について、教会法は、次のように定めています。(なお、教皇庁司教省発行の Directory for the Pastoral Ministry of Bishops, Vatican, 2004 (『司教の牧職案内書』)も参照しました。)(1) 司教は、毎年教区の全体または一部を訪問し、少なくとも5年に一度は、教区全域を訪問する義務を有する(第396条第1項)。(2) 司教は、訪問に際して随行者または助言者として聖職者を選任することができる(第396条第2項)。(3) 司教の通常視察 (ordinaria visitatio) の対象は、教区内の人物(たとえば小教区共同体)、カトリック施設、聖なる物および場所である(第397条第1項)。これには神学校(第259条第2項)、修道院(第628条第2項)、カトリック学校、カトリック福祉施設などが含まれている(第683条第1項)。(4) なお、教区司教は、5年ごとに自己に委ねられた教区の状況について教皇に報告書を提出しなければならない(第399条)。

2. 司牧訪問の目的と方法

(1) 主要目的…司教と教区共同体とのかかわりの維持発展。

A. 共同体の状態を知る。(a) 司祭の心身の健康、任務遂行における喜びと困難、(b) 小教区の台帳等、司教書簡および必要または有用な他の書類の校閲(教会法第535条第4項)、(c) 一人ひとりの信者とその状況(ヨハネ10・4、27参照)、(d) 共同体の年齢層、職業、国籍、家庭の

状況、生活の質、典礼、信仰生活、家庭と小教区での信仰教育、使徒的活動状況、地域やカトリック以外のキリスト教会および諸宗教とのかわりなど(『司教の司牧任務に関する教令』16(18参照))、(e) 各共同体の長所と短所、問題点。たとえば、活動的かどうか、相互扶助、青少年の教会参加、修道者とのかわり、高齢者や障がい者への配慮、不一致や教会離れおよびそれらの原因、(f) 経済状況、教会堂、司祭館、信徒会館などの状態、(g) 教区の動きとの連動状況

B. 信者たちを励ます。(a) 司教が掲げる目標や打ち出した方針を直接伝える、(b) 全教会、とくに教区全体の状態や動きを伝える、(c) 信仰生活全般について、あるいは教区に対する疑問や質問を受ける。

こうして、司教は、教区の宣教・司牧の優先課題と手段の決定に役立てることができる。

(2) 具体的方法…堅信式の日とは別に時間を設けるのが理想的。(1) 感謝の祭儀を行う。(b) 信徒総会のような形をとるか、少なくとも主任(および助任)司祭および小教区評議員および経済表議員と懇談する。できれば子どもや青年たちとの会合を持つ。

(3) 準備…小教区共同体は、司教の司牧訪問の前に、その目的と方法について理解すると同時に、司教に知らせる前に自分たちが自らの共同体の現状を詳細に知っておく必要がある。

(高見 三明)



凡人に見える 聖徳な人との出会い

先日私は毎年4回開かれるうちの10月の部の黙想会に参加しました。各地から老若司祭・修道士会員が集まりました。この一週間は仕事や雑務、気になることなど全てを他者に委ね参加してきます。全てのお恵みは神からのもの。神あっての私たちだからです。また黙想や講話だけでなく、暫し職場を離れ解放感の贅沢を兄弟会員と味わえる時でもあります。再会した兄弟と共に声を合わせて歌い、祈り、毎回異なったメンバーと食卓を囲むのも幸せでありますし、食後もそれぞれの場での司牧・奉仕活動、その他情報交換などの分かち合いも励みになります。修道会も高齢化にあって、手助けの必要な病いにある先輩会員の介護に当たる超高齢者の外国宣教師会員に、その労にねぎらいの声をかけると「休みは天国で貰うからいいよ。わたしは元気をもらっているから」と笑顔で答えた。まさに宣教魂というか信仰深き人は愛の人である。

つい先日のこと後輩会員を前に「もう還暦60歳、少し休ませてくれんかなあ」と、体調に気を使う年齢にいることを主張すると、「先輩、好きなことをする時は足を引きずってでもやるでしょ」「ウンそうだな」「ですからまだだいじょうぶっすよ」。「ハイ頑張ります・・・」。天国に近い、いや聖人に近い大先輩らと黙想講話をともにするのであるが、突然「ゴワーッ」と発する極楽イビキに、私の眠気もぶっ飛びます。繰り返すその管楽器が聞こえないかのように話つづける寛大な指導司祭の態度にも関心したのですが、私はすばらしい講話を聞き逃すまいと耳を傾け続けるのに必死でありました。「寝るのは仕方がないがイビキだけは辞めてもらいたい」と、講師のはじめの願いは初日にして打ち払われたのでした。それが高齢化の実態ですし、それが私たちの家族形態なのですから、それでいいのです。

ある夜、数人で入った入浴では昔話に花が咲いた。すでに高齢でお世話になった当時の教授も一緒であった。彼の講義や講話は聞く者にとって、内容もさることながら聞く者をひきつける魅力があり、誰からも尊敬され強くやさしく、我々神学生が目標とする人であり、私もその一人だった。社会生活10年の経験から神学生は社会的常識に乏しいと感じ、ある時あることで一人の後輩神学生によりベストな方法をとと思いながら勧めをしていたのだったが、ことば使いや内容も厳しい命令的なことばであったのだろう。そばを通りかかった教授は、「自分ではできなくせに。だったらあんたがやれば」と言い残して去った。一瞬ショックで耳を疑った。あの方は優秀な学生たちを好み、私は好まれてはいないなどと感じ、悔しいというより残念だった。あれから30年、その時のことをふと思い出し誤解を解くべく良い機会と思い、湯船で向き合いながら何気なく当時のことを話したのだった。するとすぐに彼は立ち上がり、「古木神父様、すみませんでした。許してしてください」と深々と頭を下げ続けた。周りのものは何が起こったのか面食らった。それより私は予想もしなかった謝意に驚き、すぐにはことばがでなかった。私は恥ずかしくてまともに顔を見れなかったが彼の涙を見た気がした。心からの悔いと心からの許しを願い求める姿。これまで体験したこともない衝撃的出来事は、今もその感動が私の心に脈打ち続けている。私の修行はまだまだ不足だらけ、人に謝り頭を下げるようなことはしていないという傲慢な心が同居していると痛感するばかり。すばらしい信仰と惜しみない愛、謙虚なこころを持ち備えたあなたに私もなりたい。



サレジオ修道会
カトリック愛野教会
主任司祭 古木眞理一

神学校紹介

<日本カトリック神学院>



東京キャンパス 聖堂横中庭から住居棟を望む

【日本カトリック神学院】 2009年4月1日、日本カトリック神学院が開校しました。日本司教団は、東京カトリック神学院と福岡サン・スルピス大神学院を合同し、ひとつの神学院として再スタートさせました。二つの神学院の校舎や敷地は、それぞれ「東京キャンパス」「福岡キャンパス」となりました。現在の神学生数は45名（東京21名、福岡24名）。長崎大司教区の場合、神学生は長崎カトリック神学院および長崎コレジオ（『言の波』46号にて紹介）を経て、本神学院に入学する場合が多く、便宜上、本神学院を「大神学院」と呼ぶこともあります。他の教区には小神学校のような養成機関がなく、長崎の小神学校やコレジオに養成を依頼する場合がありますが、直接に本神学院に入学することもできます。いずれにせよ、すべての入学志願者は本神学院入学のための審査を受けることとなります。入学審査は毎年10月初旬に行われますが、入学願書の締め切りは6月末となっております。

院に入学することもできます。いずれにせよ、すべての入学志願者は本神学院入学のための審査を受けることとなります。入学審査は毎年10月初旬に行われますが、入学願書の締め切りは6月末となっております。

【入学の条件】 「生涯、司祭として自分をささげる決意をもっており、それが本人の自由な意志であること。洗礼を受けて3年以上の信者としての生活の経験がある22歳以上、原則40歳までの独身男性であること。高校を卒業していること」。年齢制限は、必要な養成（勉強など）を十分に受け入れることができるための原則であり、例外的可能性が残されています。神学院に入学したい者は、事前に自分の属する小教区の司祭とよく相談し、教区の養成担当者と面接の上、司教の推薦を受けねばなりません。長崎教区の現在の養成担当者は、山脇守神父様（長崎コレジオ院長）と山田良秋神父様（長崎カトリック神学院院长）のお二人です。

【入学審査】 入学審査は、東京キャンパスにて数日間の共同生活をしながら、「キリスト教の一般知識」「英語」「小論文」の筆記テストおよび面接が行われます。合格者は、教区や神学院と連携しながら、入学までの準備期間を過ごします。大學生在学中の者は卒業を目指し、また職に就いている者は退職の手續きを取ることになります。

【養成期間と休暇】 神学院での養成期間は6年間（最初の2年間は東京、次の3年間は福岡、最後の1年間は東京）。夏に2カ月、年末年始に2週間、春に1ヶ月半程度の休暇があります。休暇

中は、教区が神学生の養成を行う期間とされています。多くの教区では、神学生たちは自分の家庭や出身の小教区で休暇を過ごすだけでなく、教区内外の他の小教区や施設で研修し、多くの司祭や信徒の方々と交流しながら養成されています。



2009年4月1日
開校式の後
東京キャンパス聖堂にて

1年目	哲学1年度 ／初年度	東京	
2年目	哲学2年	東京	助祭・司祭候補者認定へ
3年目	神学1年	福岡	朗読奉仕者選任へ
4年目	神学2年	福岡	祭壇奉仕者選任へ
5年目	神学3年	福岡	助祭叙階へ
6年目	神学4年 ／助祭	東京	司祭叙階へ

【運営経費】 神学院に直接いただく寄付金はすべて運営費として計上されますが、神学院の通常の運営経費は、16教区が分担します。各教区は、神学生がいなくても信徒数の割合によって必ず分担する基本分担金、また神学生一人当たり年間150万円（2009年度）の養成費を負担します。信徒数や神学生数が多い教区は当然負担額が多くなります。そのお金を教区内でどのように捻出するかの方法はさまざまですが、神学生やその家族が経費の一部を負担している教区はありません。神学院までの交通費や教科書代などの必要経費も教区が負担しています。

【養成スタッフ】「養成者」と呼ばれる神学院の常駐スタッフ(司祭)は、現在11名(東京5名、福岡6名)おり、東京には聖心の布教姉妹会(4名)、福岡ではシヨファイユの幼きイエズス修道会(6名)のシスター方、さらに事務や図書、調理のための職員(正職員5名、他パート職員6名)もおります。その他、外部からのたくさんの講師の方々が講義を担当してくださっています。

【共同生活と養成】 神学生は個室を持っておりませんが、共同生活の中で養成されます。週日は、朝の祈り・念祷・ミサにはじまり、日中は講義を受けます。宿題や試験もあります。共同での祈り、典礼準備や奉仕、講話や分ち合い、院内の掃除や食後の片づけなどの奉仕作業もあります。週末には小教区に派遣され、宣教・司牧実習が行われます。派遣先の司祭のもとで信徒とふれあい、ミサでの奉仕、大人や子供たちのための勉強会などを担当しながら、経験を積んでいきます。また、定期的に霊的同伴司祭のもとに赴き、自分の召命や霊的な状態、現在の生活などについて自分を見つめていく作業が行われます。

【いくつかの規則】 起床・消灯時間はありませんが、朝6時15分に祈りがはじまります。講義などの日課に差しつかえなければ日中の外出は可能ですが、共同の祈りなどへの参加はもちろんのこと、食事も日課であり参加する義務があります。食べる量は自由です。夕食後の外出および外泊には許可が必要です。初年度生は携帯電話を所持することができません。2年目以後は、

教区の方針によっても異なりますが、長崎教区の場合は、学期中の携帯電話の使用は認められていません(休暇中は可)。図書閲覧室ではインターネットができ飲酒や喫煙は定められた場所でのみ可能であり、個室では禁止です。

【初年度と助祭コース】 初年度は、特に司祭としての人間的な基礎固めが行われます。心理学的手法を用いながら自分を診断し、人間関係を深めることを学びます。共同で食事を作り、霊的修養、ボランティア活動も行われます。一方、6年目(助祭)には、神学総合試験やさまざまな司牧現場での体験学習が行われます。

【進級と審査】 神学生は、年度の初めに、自分の個人課題を提出し、養成者からも課題が与えられます。秋になると、次の学年、すなわち認定、選任、叙階へ進みたい旨を申し出て、自己評価書の提出が求められます。養成者は、実習先などへの調査を行い、人間的、霊的、知的、宣教・司牧的側面から神学生を評価し、推薦会議を開きます。これらすべての書類は司教に送付され、教区での審査を経て、認定、選任、叙階の恵みに到達します。

【養成の責任】 司教団は、神学院のための「養成理念と指針」を作成しました。これが神学院での養成の基本軸となります。重要事項に関しては、16教区の司教全員で審議します。各教会管区(東京・大阪・長崎)からそれぞれ2名の司教が選ばれ、それに神学院養成者も加わり、「神学院常任司教委員会」が形成され、年に4回会議が行われます。神学院内の通常の養成・運営管理は、養成

者全員によって行われる養成者会議が責任をもって遂行します。神学生は、養成者会議に意見申請などを行うことができます。また、各教区の養成担当者は年に一度神学院に集い、養成者および神学生と面接します。こうして養成は、教区、神学院そして神学生の三者がそれぞれ固有の責任を保ちつつも、協力的に行われます。

【教会から教会へ】 司祭召命は神の民の中から生まれ、神の民の中で育まれ、神の民へと派遣されていくものです。神学院を修了し、司祭に叙階された新司祭は、司教および司祭団との絆のうちに、また実際に神の民に奉仕しながら、司祭として成長を続けます。常に、成長(回心)していくことのできる基礎を神学院で身につけるのであると思っています。ご来院をお待ちしております。

(日本カトリック神学院院长 牧山強美)



福岡キャンパス 本館と聖堂

生活教会 の中の



米山教会

フォトプラン 山本 富夫

米山

津和崎瀬戸に面する米山の中腹に建つ教会堂。白亜の容姿は緑に映え、その信仰を際立たせている。

一八八九年、テュラン師によって山頂付近に最初の教会堂が建立されたという。その後、山道の不便さもあり、十数年後の一九〇三年、集落の中心部に二代目の教会堂を献堂。

七〇余年を経た一九七七年、老朽化のため現教会堂を建立。

永田静一師と信徒の労作である教会堂は今、往時の輝きを保ち、眼下を行き交う陸海の人々を日々見守っている。